

堀辰雄 著 施小煒 譯

風起了

風立ちぬ

日漢對照・精裝有聲版



香港中和出版有限公司
www.hkopenpage.com

目 録

<small>じょきょく</small> 序曲	002	序曲	003
<small>はる</small> 春	016	春	017
<small>かぜ た</small> 風立ちぬ	046	風起了	047
<small>ふゆ</small> 冬	122	冬	123
<small>よる</small> 夜	158	夜	159
<small>し</small> 死の <small>たに</small> かげの谷	172	死蔭谷	173

*Le vent se lève,
il faut tenter de vivre.*

風乍起。合當奮意向人生。

PAUL VALÉRY

じよきよく
序曲

それらの夏の日々、一面に薄の生い茂った草原の中で、
お前が立ったまま熱心に絵を描いていると、私はいつもそ
の傍らの一本の白樺の木蔭に身を横たえていたものだった。
そうして夕方になって、お前が仕事をすませて私のそば
に来ると、それからしばらく私達は肩に手をかけ合った
まま、遙か彼方の、縁だけ茜色を帯びた入道雲のむくむ
くした塊りに覆われている地平線の方を眺めやっていたも
のだった。ようやく暮れようとしかけているその地平線か
ら、反対に何物かが生まれて来つつあるかのように……

そんな日の或る午後、(それはもう秋近い日だった)私
達はお前の描きかけの絵を画架に立てかけたまま、その白
樺の木蔭に寝そべて果物を齧っていた。砂のような雲
が空をさらさらと流れていた。そのとき不意に、何処から
ともなく風が立った。私達の頭の上では、木の葉の間か
らちらっと覗いている藍色が伸びたり縮んだりした。それ
と殆んど同時に、草むらの中に何かがぼったりと倒れる物
音を私達は耳にした。それは私達がそこに置きっぱなし

序曲

那些連綿夏日，當你站在遍地芒草叢生的草原中聚精會神地作畫，我便總是橫身斜躺在近旁的一株白樺樹蔭裡。於是到了黃昏時分，你擱下畫筆來到我的身畔，隨之便會有一段時間，我們倆伸手摟著彼此的肩膀，極目遠眺天際那唯獨周緣鑲著茜紅色的大團積雨雲覆蓋下的地平線。從暮色蒼茫的地平線邊，彷彿反倒有某種生命正待降生一般……

就在這樣的一個午後，（那是一個已近秋令的日子）我們倆將你畫了半截的畫作豎在畫架上，躺在那棵白樺樹蔭裡啃著水果。流沙般的雲彩拂掠過蒼穹。這時，忽然一陣風不知從何處吹來。我們的頭頂上，在枝葉間偶一探險的那一抹湛藍忽而舒展忽而收捲。幾乎與此同時，我們聽見草叢裡傳來了呼的一聲物體倒地的聲響。好像是我們扔在那裡不顧的油畫連同畫架一道摔倒的響聲。你便想立即起身前去，我卻硬將你一把拉住，不放你離開我的身畔，彷彿不願失去眼前這一瞬間裡的某

にしてあった絵が、画架と共に、倒れた音らしかった。すぐ立ち上って行こうとするお前を、私は、いまの一瞬の何物をも失うまいとするかのように無理に引き留めて、私のそばから離さないでいた。お前は私のするがままにさせていた。

風立ちぬ、いざ生きめやも。

ふと口を衝いて出て来たそんな詩句を、私は私に靠れているお前の肩に手をかけながら、口の裡で繰り返していた。それからやっとお前は私を振りほどいて立ち上って行った。まだよく乾いてはいなかったカンヴァスは、その間に、一めんに草の葉をこびつかせてしまっていた。それを再び画架に立て直し、パレット・ナイフでそんな草の葉を除りにくそうにしながら、

「まあ！こんなところを、もしお父様にでも見つかったら……」

お前は私の方をふり向いて、なんだか曖昧な微笑をした。

「もう二三日したら、お父様がいらっしゃるわ」

或る朝のこと、私達が森の中をさまよっているとき、突然お前がそう言い出した。私はなんだか不満そうに黙っていた。するとお前は、そういう私の方を見ながら、すこし

樣東西似的。你則聽任我如此施為。

風乍起。合當奮意向人生。

我將手搭在偎依著我的你的肩頭，口中反覆吟誦著這行陡然脫口而出的詩句。然後你終於掙脫我，起身離去。尚未乾透的畫布在此期間已然黏滿了草葉。你一面將它重新豎在畫架上，用調色刀艱難地剔除那些草葉，一面說道：

「這可好，要是叫父親瞧見了……」

你扭過臉來望著我，露出略帶曖昧的微笑。

「再過兩三天，父親就要來啦！」

一日清晨，我們徜徉在森林間，你突然這麼開口說道。我彷彿不悅似的沉默不言。於是你望著我這副神態，聲音微微有些啞地，再度開口道：

しやが しゃが
こえ ふたた くち
暖れたような声で再び口をきいた。

「そうしたらもう、こんな散歩も出来なくなるわね」

「どんな散歩だって、しょうと思えば出来るさ」

わたし ふまん まえ き
私はまだ不満らしく、お前のいくぶん気づかわしそ
うな視線を自分の上に感じながら、しかしそれよりももっと、
わたしたち ずじょう こずえ なん き
私達の頭上の梢が何とはなしにざわめいているのに気を
と
奪られているような様子をしていた。

「お父様がなかなか私を離して下さらないわ」

わたし ほう じ かえ い め
私はとうとう焦れたいとでも云うような目つきで、お
前の方を見返した。

「じゃあ、僕達はもうこれでお別れだと云うのかい？」

「だって仕方がないじゃないの」

そういってお前はいかにも諦め切ったように、私につ
とめて微笑んで見せようとした。ああ、そのときのお前の
かおいろ ほほえ み くちびる いろ なん あお
顔色の、そしてその唇の色までも、何と蒼ざめていたこ
とったら！

「どうしてこんなに変わっちゃったんだろうなあ。あんなに
わたし なに まか き み
私に何もかも任せ切っていたように見えたのに……」と
わたし かんが かつこう ら こん
私は考えあぐねたような恰好で、だんだん裸根のごろご
ろし出して来た狭い山径を、お前をすこし先にやりながら、
いかにも歩きにくそうに歩いて行った。そこいらはもうだ
いぶ木立が深いと見え、空気はひえびえとしていた。とこ
ろどころに小さい沢が食いこんだりしていた。突然、私の
あたま なか かんが ひらめ まえ なつ ぐうぜん
頭の中にこんな考えが閃いた。お前はこの夏、偶然出

「那樣的話，像這樣的散步也不成啦。」

「甭管像怎樣的散步，只要想，就能夠成。」

我似乎猶自心存不悅，分明感受到你不無憂戚的目光落在我身上，卻裝出一副更為我們頭頂上樹梢間那毫無來由的喧呶聲奪去了注意力的模樣。

「父親可是不會讓我離開他的喲。」

我終於按捺不住，用差不多可算是焦灼的眼神，回視你：

「那就是說，咱倆這就得分道揚鑣嘍？」

「這不是沒有辦法嗎？」

說罷，你似乎萬念俱灰，努力要衝我做出微笑的模樣。啊啊，那時候你的面色，甚至連你的唇色，都是何等蒼白！

「怎麼變化會如此之大呢？看上去明明是把一切悉數交託給了我的樣子嘛……」

我滿臉的百思不解，沿著裸露的樹根愈來愈多的狹仄山道，讓你走在數武之前，步履維艱地走去。那一帶看來已入叢林深處，空氣冷森森的。隨處可見小小的水澤侵蝕進林間來。突然，我的腦海中閃過這樣一個念頭：你會不會就像對待我這個今年夏天才偶然相逢的人也這般溫順一樣——不，甚或更有過之——對你的父親，以及也包括你父親在內的、始終支

あ わたし もの じゅうじゆん
逢った私のような者にもあんなに従順だったように、い
や、もっともっと、お前の父や、それからまたそういう父
をも数に入れたお前のすべてを絶えず支配しているものに、
す なお み まか き
素直に身を任せ切っているのではないだろうか？……「節
子！そういうお前であるのなら、私はお前がもっともっと
好きになるだろう。私 がもっとしっかりと生活の見透しがつく
ようになったら、どうしたってお前を貰いに行くから、そ
れまではお父さんの許に今のままのお前であるがいい……」

わたし じぶん じしん い き
そんなことを私は自分自身にだけ言い聞かせながら、し
かしお前の同意を求めでもするかのように、いきなりお前
の手をとった。お前はその手を私にとられるがままにさせ
ていた。それから私達はそうして手を組んだまま、一つの
さわ まえ た ど お だ ま わたしたち あしもと ふか
沢の前に立ち止まりながら、押し黙って、私達の足許に深
く くい こんでいる小さな沢のずっと底の、下生の羊歯など
の上まで、ひ ひかり かずし えだ ひく かん
日の光が数知れず枝をさしかわしている低い灌
木 ぼく すき ま くぐ ぬ まだ し お
木の隙間をようやくのことで潜り抜けながら、斑らに落ち
ていて、そんな こも び が そ こ ま で とど ほと
かないか位になっている微風にちらちらと揺れ動いている
のを、なにか切ないような気持ちで見つめていた。

に さんにち あ ゆうがた わたし しょくどう まえ
それから二三日した或る夕方、私は食堂で、お前がお
まえ わか き ちち しょくじ とも みいだ
前を迎えに来た父と食事を共にしているのを見出した。お
まえ わたし ほう せなか む ちち がわ
前は私の方にぎごちなさそうに背中を向けていた。父の側
にいることがお前に殆んど無意識的に取らせているにちが
ようす どうき わたし まえ み
いない様子や動作は、私にはお前をついぞ見かけたことも

配著你一切的人們，也百依百順呢？……「節子！如果你當真是那樣一個人，我大概會更加喜歡你吧。等到我的生活前景再穩定一些，我非去迎娶你不可，而在那之前，你就待在你父親的身邊，就像現在這個樣子便好……」

這些話，我只說給了自己一人聽，卻彷彿要徵求你同意似的，猛然抓住你的手。你便聽由我抓著它。然後我倆就這麼手牽著手，佇立在一灣水澤前，默默無言，心情黯淡地凝視著陽光穿過無數枝條葳蕤縱橫的低矮灌木間隙，最終斑斑點點地抵落在小小水澤最底處叢生於樹木下的蕨類之上。這枝葉間泄露的縷縷陽光直至抵落那裡之前，始終在似有似無的微風中搖曳不止。

又過了兩三日之後的一個傍晚，我在餐廳裡找到了正在共進晚餐的你和前來接你回家的父親。你笨拙地將後背對著我。守在父親身畔時你差不多是無意之間流露出的神態和舉止，讓我感覺到你彷彿是一個我從未謀面的陌生女郎。

ないような若い娘のように感じさせた。

「たとえ私^{わたし}がその名^なを呼^よんだにしたって……」と私^{わたし}は一人^{ひとり}でつぶやいた。「あいつは平気^{へいき}でこっちを見向^{みむ}きもしないだろう。まるでもう私^{わたし}の呼^よんだものではないかのよう
に……」

その晩^{ばん}、私^{わたし}は一人^{ひとり}でつまらなそうに出^でかけて行^いった散歩^{さんぽ}からかえって来^きてからも、しばらくホテル^{ひと}の人^{ひと}けのない庭^{にわ}の中^{なか}をぶらぶらしていた。山百合^{やまゆり}が匂^{にお}っていた。私^{わたし}はホテル^{まど}の窓^{まど}がまだ二^{ふた}つ三^{みつ}つあかりを洩^もらしているのをぼんやり^みと見^きつめていた。そのうちすこし霧^{きり}がかかって来^きたようだった。それを恐^{おそ}れでもするかのよう^{まど}に、窓^{まど}のあかりは一つ^{ひとつ}ひとつ消^きえて行^いった。そしてとうとうホテル^{じゅう}中^{ちゅう}がすっかり真^まっ暗^{くら}になったかと思^{おも}うと、軽^{かる}いきしりがして、ゆるやかに一つの窓^{まど}が開^{ひら}いた。そして薔薇^{ばら}色の寝衣^{いろねまき}らしいものを着^きた、一人^{ひとり}の若い娘^{わかむすめ}が、窓^{まど}の縁^{ふち}にじっと凭^よりかか^だり出した。それはお前^{まえ}だった。……

お前^{まえ}達^{たち}が発^たって行^いったのち、日^ひごと日^ひごとずっと私^{わたし}の胸^{むね}をしめつけていた、あの悲^{かな}しみに似^にたような幸^{こう}福^{ふく}の雰^{ふん}圍^い気^きを、私^{わたし}はいまだにはっきりと蘇^{よみがえ}らせることが出来る^{でき}。

私^{わたし}は終^{しゅう}日^{じつ}、ホテル^とに閉^{こも}じ籠^籠っていた。そうして長い間^{ながあいだ}お前^{まえ}のため^{うっちゃ}に打^お棄^じて置^おいた自^じ分^{ぶん}の仕^し事^{ごと}に取りかか^とり出^だした。私^{わたし}は自^じ分^{ぶん}にも思^{おも}いがけな^{ぐらい}い位^{しず}、静^{しず}かにその仕^し事^{ごと}に没^{ぼつ}頭^{とう}することが出来^{でき}た。そのうち^{ほか}にすべ^きてが他^{ほか}の季^き節^{せつ}に移^{うつ}っ

「就算我呼喚她的名字……」我自言自語道，「大概那丫頭也會毫不在乎地對我不理不睬吧。好像根本就不是我在呼喚她一般……」

那一晚，我百無聊賴地獨自出門散步歸來後，又在旅舍闐然無人的庭院裡久久徘徊。天香百合香氛飄溢。我茫然凝望著旅舍兩三隻猶自燈光漏泄的窗戶。須臾，似乎有霧靄冉冉升起。彷彿是對它心存畏懼似的，窗口的燈光一盞盞地熄滅了去，於是整座旅舍終於沉入一片漆黑之中。就在這時，傳來吱呀一聲輕響，一頁窗扇緩緩開啟，只見一個身著薔薇色睡衣似衣物的妙齡女郎憑窗靜立。那便是你……

我至今依然能夠清晰地回憶起你們離去之後，日復一日始終壓迫著我心靈的、那種類乎哀傷的幸福氛圍。

我終日在旅舍裡閉門索居，並且重新拾起為了你的緣故而拋擲已久的工作。連自己都沒有意料到，我居然能夠那般平靜地埋頭工作。未幾，一切都移徙進入了另一季節，而就在自己也將將啟程離去的前一日，我時隔多日之後出門散步去了。

行った。そしていよいよ私も出発しようとする前日、
私はひさしぶりでホテルから散歩に出かけて行った。

秋は林の中を見ちがえるばかりに乱雑にしていた。葉のだいぶ少なくなった木々は、その間から、人けの絶えた別荘のテラスをずっと前方にのり出させていた。菌類の湿っぽい匂いが落葉の匂いに入りまじっていた。そういう思いがけない位の季節の推移が、——お前と別れてから私の知らぬ間にこんなにも立ってしまった時間というもの、私には異様に感じられた。私の心の裡の何処かしらに、お前から引き離されているのはただ一時的だと云った確信のようなものがあって、そのためこうした時間の推移までが、私には今までとは全然異った意味を持つようになり出したのであろうか？……そんなようなことを、私はすぐあとではっきりと確かめるまで、何やらぼんやりと感じ出していた。

私はそれから十数分後、一つの林の尽きたところ、そこから急に打ちひらけて、遠い地平線までも一帯に眺められる、一面に薄の生い茂った草原の中に、足を踏み入っていた。そして私はその傍らの、既に葉の黄いろくなりかけた一本の白樺の木蔭に身を横たえた。其処は、その夏の日々、お前が絵を描いているのを眺めながら、私がいつも今のように身を横たえていたところだった。あの時にはほとんどにゆうどうぐもさえぎられていた地平線のあたりには、今は、何処か知らない、遠くの山脈までが、真っ白な穂先

秋，令林中變得雜亂紛紜、面目全非。殘葉稀疏的樹木從其枝丫間，讓人去樓空的別墅露台探身展露在迢迢的前方。菌類潤濕的氣味屬雜在落葉的氣味裡。這出人意料的季節推移，——自與你一別之後，光陰不知不覺之中消逝如飛，令我難禁異樣之感。是否在我心中存在著某種確信，覺得我與你被生生拆散只是一時之厄，因而就連這樣的時光流逝，於我而言也變得擁有了與迄今全然不同的意義？……對此，在稍後不久我徹底究明之前，一直就已隱隱約約地有所感知。

十多分鐘後，我走到叢林的盡頭，踏入芒草遍野叢生的草原之中，面前豁然開朗一覽無餘，連遙遠的地平線也盡收眼底。於是我在一旁葉片已然發黃的一株白樺樹蔭裡橫身躺下。此地就是這年夏日裡，我像此刻一樣斜躺著看你作畫的去處。當時幾乎始終遮蔽在積雨雲後的地平線上，如今卻連不知其名的遙遠山脈，也撥開搖曳不已的芒草梢尖上的蒼穹，將其輪廓一一清晰地顯現了出來。

をなびかせた^{すすき}薄^{うえ}の上^わを分けながら、その輪^{りんかく}廓^{ひと}を一つ一つ^{ひと}くつきりと見^みせていた。

私^{わたし}はそれらの遠^{とお}い山^{さん}脈^{みやく}の姿^{すがた}をみんな暗^{あん}記^きしてしまう
位^{くらい}、じっと目^めに力^{ちから}を入れて見^い入^みっているうちに、いまま
で自分^{じぶん}の裡^{うち}に潜^{ひそ}んでいた、自然^{しぜん}が自分^{じぶん}のために極^{きわ}めて置^おい
てくれたものを今^{いま}こそ漸^やつと見^み出^{いだ}したと云^いう確^{かく}信^{しん}を、だん
だんはつきりと自分^{じぶん}の意^い識^{しき}に上^{のぼ}らせはじめていた。……

我用力睜大雙眼凝望遠山，幾乎要將它們的身姿熟記於心。漸漸地，一種確信湧上心頭昭然可見：此刻，我總算找到了一直在自己心中深藏不露的、大自然惠賜予我的東西……

はる
春

さんがつ 三月になった。あ ころ ごと わたし 午後、私 がいつものようにぶらっと
さん ぼ
散歩のついでにちょっと立寄ったとでも云った風に節子の家
おとず を訪れると、もん 門をはいったすぐ横の植込みの中に、ろうどうしゃ
のかぶるような大きな麦稈帽をかぶった父が、ちち 片手に かん 鋏を
もちながら、そこいらの木の手入れをしていた。わたし 私 はそうい
う すがた 姿を認めると、まるで子供のように木の枝を搔き分けな
がら、そのそば 傍に近づいていって、ふたこと みこと あいさつ 二言三言挨拶の言葉 こと ぼ 言葉を交
したのち、そのま ちち 父のすることを物珍らしそうに見ていた。
— そう やって うえこ 植込みの中にすっぽりと身を入れてみると、
あちらこちらちいの小さな枝えだの上うえにときどき何かしらなに白いものしろが
ひか 光ったりした。それはみんな つぼみ 蒼らしかった。……

「あれもこの頃ごろはだいぶ元気げんきになって来たようだが」父ちちは
とつぜん 突然そんな わたし 私 の方へ ほう 顔かおをもち上げて、その頃ころ私わたしと こんやく 婚約し
たばかりの節子せつこのことを言い出した。

「もう少しすこ好い陽気ようきになったら、てんち 転地でもさせて見たらど
うだろうね？」

「それはいいでしょうけれど……」と私わたしは口くちごもりなが
ら、さっきからめ 目の前まえにきらきら光ひかっている一つの ひとつ つぼみ 蒼ひとがな

春

三月了。一日午後，我像平素一樣，假作信馬由韉的散步途中順便路過，走訪了節子的家。大門內裡的花木叢中，頭戴著工人們常戴的那種大草帽的節子父親手執剪刀，正在修剪身旁的樹木。我一看見他，便像小孩子一般撩開樹枝走近他身邊，三言兩語地寒暄了幾句之後，就立在那裡滿心好奇地瞧著他幹活。當整個身子都埋沒於花木叢中，便可見縱橫交織的細小枝條上，不時會有白色的物體隱約閃爍。那些似乎全是花蕾……

「小女最近好像身體也好多啦。」父親突然仰臉望著我，說起了剛剛與我訂婚不久的節子的事。

「等她情況再好一點，就試試轉地療養，你看如何？」

「那自然很好啦……」我吞吞吐吐地答道，裝作一直在關注眼前一朵晶晶閃亮的花蕾的模樣。

んだか^き気になってならないと云った^い風^{ふう}をしていた。

「何^ど処^こぞいいところはな^いか^とこの^{あいだ}間^いうちから物^{ぶつ}色^{しよく}しと
るのだがね——」と父^{ちち}はそんな私^{わたし}には構^{かま}わずに言^いいつづけ
た。「節^{せつ}子はFのサナトリウムなんぞどうか知^しらんと^い言うの
じゃが、あなたはあそこ^{いんちよう}の院^し長^しさんを知^しっておいで^いだそ^い
うだね？」

「ええ」と私^{わたし}はすこし上^{うわ}の空^{そら}でのよう^{へんじ}に返^{へん}事^じをしなが^ら
やっ^ととさ^きき見^みつけた白^{しろ}い荅^{つぼみ}を手^てもと^にたぐりよ^せた。

「だが、あそこ^{ひとり}なんぞは、あれ^い一^お人^{ひと}で行^いって居^おられるだ^ら
うか？」

「みんな^{ひとり}一^い人^{ひと}で行^いっているよう^すですよ」

「だが、あれ^いにはな^いかな^いか行^いって居^いられ^まい^いね？」

父^{ちち}はなんだか^{こま}困^かったよ^おうな^い顔^いつきをし^いたま^ま、し^わかし私^{わたし}
の方^{ほう}を見^みず^に、自^じ分^{ぶん}の目^めの前^{まえ}にある木^きの枝^{えだ}の^{ひと}一つ^{ひと}へい^きな
り^は鋏^さを入^いれた。それを見^みると、私^{わたし}は^わたし^しは^どう^とう^が我^{まん}慢^{まん}がし^き
き^れな^くな^って、それ^を私^{わたし}が^い言^いい^だす^のを^を父^{ちち}が^ま待^まっ^てい^ると
し^かお^もわ^れな^い言^{こと}葉^ばを、つ^いと^くち^だ口^{くち}に出^だした。

「なんでしたら僕^{ぼく}も一^{いっしょ}緒^いに行^いって^もい^いい^んです。いま、し
か^けて^いる^し仕^し事^{ごと}の^{ほう}方^{ほう}も、丁^{ちよう}度^どそれ^まで^には片^{かた}が^つき^そう^で
す^から……」

私^{わたし}は^いそ^う言^いい^なが^ら、や^っと^て手^ての中^{なか}に入^いれた^ばか^りの
荅^{つぼみ}の^{えだ}つ^{いた}枝^{えだ}を^ふた^たと^て再^てび^ばそ^っと^て手^て離^なした。それ^と同^{どう}時^じに^{ちち}父^{ちち}の
顔^{かお}が^き急^{きゆう}に^あか^あら^なく^なった^のを^を私^{わたし}は^みと^と認^めた。

「^いそ^うして^いた^だけ^たら、一^{いち}番^{ばん}い^いの^だが、——^しかし^あ

「這陣子正在物色有啥好地方——」父親毫不理會我的拿腔作調，自顧自說道：「節子提出來，說是F療養院不知咋樣。聽說你認識那裡的院長，是嗎？」

「是的。」我有點兒神思恍惚地答道，終於將方才發現的白色花蕾拽到了身前。

「不過，那裡的話，小女一個人去，行不行呀？」

「好像大家都是一個人去的喲。」

「可是，小女的話，一個人只怕不成吧？」

父親面露不無為難的神色，然而卻不看我，衝著自己眼前的一截樹枝便是一剪刀。見此情形，我終於按捺不住，衝口說出了無疑是父親期待著由我來說的話。

「要不然，我也陪著一起去好了。現在手頭做了一半的工作，到那時候剛好也該有些眉目了……」

我一邊這麼說著，一邊輕輕鬆開手，將好不容易才抓到手的
花蕾未綻的枝條又放了回去。與此同時，我看到父親的表情一下子明朗了起來。

「你能夠這麼做，自然再好不過嘍。——就是太委屈

あなたにはえろう濟まんな……」

「いいえ、僕なんぞにはかえってそう云った山の中の方が
仕事ができるかも知れません……」

それから私達はそのサナトリウムのある山岳地方のこと
など話し合っていた。が、いつのまにか私達の会話は、父
のいま手入れをしている植木の上に落ちていった。二人の
いまお互に感じ合っている一種の同情のようなものが、
そんなとりとめのない話をまで活気づけるように見えた。

……

「節子さんはお起きになっているのかしら？」しばらくし
てから私は何気なさそうに訊いてみた。

「さあ、起きとるでしょう。……どうぞ、構わんから、其
処からあちらへ……」と父は鋏をもった手で、庭木戸の方
を示した。私はやっと植込みの中を潜り抜けると、蔦がか
らみついて少し開きにくい位になったその木戸をこじあけ
て、そのまま庭から、この間まではアトリエに使われてい
た、離れのようにになった病室の方へ近づいていった。

節子は、私の来ていることはもうとうに知っていたらし
いが、私がそんな庭からはいって来ようとは思わなかった
らしく、寝間着の上に明るい色の羽織をひっかけたまま、
長椅子の上に横になりながら、細いリボンのついた、見か
けたことのない婦人帽を手でおもちゃにしていた。

私がフレンチ扉ごしにそういう彼女を目に入れながら近
づいて行くと、彼女の方でも私を認めたらしかった。彼女

你啦……」

「哪裡，像我這種人，在那樣的山裡頭沒準兒反而更能出活也說不定呢……」

隨後我們聊了一會兒那家療養院所在的山嶽地帶，然而曾幾何時，我們的話題又落到了父親正在拾掇的花卉上。此時此刻兩人彼此間感受到的類似同病相憐的某種心緒，竟讓這種漫無邊際的閒談也顯得生氣勃勃……

「節子她起來了嗎？」過了片刻之後，我若無其事地問了一句。

「哦，大概起來了吧。……請請，沒關係的，從那邊往那邊……」父親用拿著剪刀的手，指了指院落的柵欄門。我穿過叢叢花木，使勁扳開那扇纏滿了爬山虎的澀滯的柵欄門，徑直從院子裡向著那間不久之前還用作畫室、如今卻變成了病房的別廳走了過去。

節子似乎早就知道我已然到了，卻沒有想到我會這麼從院子裡走進來。她在睡衣外邊罩了件鮮麗的短褂子，躺在長椅上，手中把玩著一頂飾有細絲帶、我從未見過的女帽。

我透過法式玻璃門望著她那嬌態，走近前去。她似乎也瞧見了我，下意識地做出起身的動作，然而卻依舊躺著未動，

春。

は無意識に立ち上ろうとするような身動きをした。が、彼女はそのまま横になり、顔を私の方へ向けたまま、すこし気まり悪そうな微笑で私を見つめた。

「起きていたの？」私は扉のところで、いくぶん乱暴に靴を脱ぎながら、声をかけた。

「ちょっと起きて見たんだけど、すぐ疲れちゃったわ」

そう言いながら、彼女はいかにも疲れを帯びたような、力なげな手つきで、ただ何ということもなしに手で弄んでいたらしいその帽子を、すぐ脇にある鏡台の上へ無造作にほうり投げた。が、それはそこまで届かないで床の上に落ちた。私はそれに近寄って、殆ど私の顔が彼女の足のさきにくっつきそうになるように屈み込んで、その帽子を拾い上げると、今度は自分の手で、さっき彼女がそうしていたように、それをおもちゃにし出していた。

それから私はやっと訊いた。「こんな帽子なんぞ取り出して、何をしていたんだい？」

「そんなもの、いつになったら被れるようになるんだか知れやしないのに、お父様ったら、きのう買っておいでになったのよ。……おかしなお父様でしょう？」

「これ、お父様のお見立てなの？ 本当に好いお父様じゃないか。……どおれ、この帽子、ちょっとかぶって御覧」と私が彼女の頭にそれを冗談半分かぶせるような真似をしかけると、

「厭、そんなこと……」

將臉朝向我，略顯羞澀地微笑著盯著我看。

「起來了嗎？」我站在門邊，稍稍有些粗暴地脫著鞋，對她說道。

「試著起來了一小會兒，可馬上就感到累了。」

她一邊這麼說著，一邊用明顯帶著倦意的無力的手勢，將無所事事拿在手裡把玩著的那頂帽子漫不經意地拋向近在咫尺的梳妝台。然而帽子在半道上便掉落了下去。我走近它，俯下身去，臉幾乎湊到了她的腳尖，拾起帽子，這下卻拿在自己手中，就像方才她做過的那樣，把玩了起來。

然後我才問道：「把這種帽子拿出來幹嗎？」

「這東西，誰知道幾時才有機會戴它，可父親也真是的，昨天卻買了回來。……父親是不是有點怪怪的呀？」

「這，是父親給你挑的嘍？真是一位好父親呀，不是嗎？……來，把帽子戴上試試。」我半開玩笑地作勢要給她戴在頭上。

「別，別這樣……」

春^は

彼女の^{かのじよ}はそう^い言って、うるさ^さそうに、それを^さ避けでもする
ように、半ば^{なか}身^みを^{おこ}起した。そうして^い言い^{わけ}訳^{よわ}のように^{よわ}弱々^わし
い^{びしやう}微笑^みをして^み見^{おも}せながら、ふい^{おも}と^だ思い^だ出した^いように、いく
ぶん^や瘦^めせの^め目^だ立つ^て手^てで、すこし^{もつ}纏^{かみ}れた^な髪^おを^な直^おしは^めじめた。
その^{なにげ}何^な気^げなし^なに^しして^いいる、それで^いいて^いか^にも^し自然^{ぜん}に^{わか}若^わい
女^{おんな}らしい^な手^てつき^つは、それが^わまる^たで^わ私^{わたし}を^{あい}愛^ぶ撫^ぶでも^だし^だした
か^いの^きよ^きう^なな、呼^い吸^きづ^きまる^まる^るほ^ほど^どセ^セン^シユ^アル^ルな^な魅^み力^{りよく}を^わ私^{わたし}に^し
感^{かん}じ^じさ^させ^せた。そうして^おそれは、思^{おも}わ^わず^ずそれ^{それ}から^から^から^から^か私^{わたし}が^め目^めを^めそ
ら^らさ^さず^ずに^には^はい^いら^られ^れな^ない^いほ^ほど^どだ^だっ^った^た……

や^わが^たて^て私^{わたし}は^もそれ^もまで^あ手^てで^て弄^もん^もで^あいた^あ彼女の^{かのじよ}帽子^{ぼうし}を、
そ^わと^き脇^{きよう}の^だ鏡^{うえ}台^の上^のに^な載^かせ^がると、ふい^なと^かん^が考^だえ^だし^だした
よ^だう^だに^だ黙^かり^{じよ}こ^めんで、な^かお^{じよ}も^めそ^めう^めい^めう^め彼女^{かのじよ}から^かは^か目^めを^めそ^めら^めせ
つ^つづ^づけ^けて^てい^いた。

「お^{かのじよ}お^{とつぜん}こ^{わたし}り^みに^あな^あった^あの^あ？」と^あ彼女^{かのじよ}は^あ突^あ然^あ私^{わたし}を^あ見^あ上^あげ^あな^あが^あら、
き^きづ^きか^かわ^わし^しそ^そう^そに^そ問^とう^とた。

「そ^わう^わじ^じゃ^じな^ない^いん^んだ^だ」と^{わたし}私^{わたし}は^かや^{じよ}っ^{じよ}と^{ほう}彼女^{ほう}の^め方^めへ^め目^め
を^めや^めり^めな^めが^めら、そ^はれ^はか^から^か話^はの^{つづ}続^{つづ}き^{つづ}で^{つづ}も^{つづ}な^{つづ}ん^{つづ}で^{つづ}も^{つづ}な^{つづ}し^{つづ}
に、出^だし^だ抜^ぬけ^ぬに^ぬこ^いう^だ言^だい^だ出^だした。「さ^さっ^さき^さお^さ父^{とう}様^{さま}が^さそ^さ
う^い言^いっ^いて^いい^いら^いし^いた^いが、お^ま前^{まえ}、ほ^ほん^ほと^とう^うに^いサ^いナ^いト^いリ^いウ^いム^いに^い行^い
く^き気^きか^かい^い？」

「え^ええ、こ^こう^こし^して^てい^いて^ても、い^いつ^つ良^よく^くな^なる^るの^のだ^だか^か分^わら^わな^ない^いの^の
で^です^すもの。早^{はや}く^く良^よく^くな^なる^るん^んなら、何^ど処^こへ^へで^でも^も行^いっ^いて^てい^いる^るわ。
で^でも……」

「ど^いう^いした^たの^のさ^さ?な^いん^んて^て言^いう^うつ^つも^もり^りだ^だっ^った^たん^んだ^だい^い？」

她說道，似乎心嫌絮煩，想要躲開去一般，支起半個身子。隨即彷彿辯解般地作出弱弱的微笑，又彷彿忽然想起來似的，用稍顯纖瘦的手，梳攏起略微凌亂的頭髮來。那隨性而為自然之極的手勢，少女味十足，宛如伸手愛撫我一般，讓我感受到一種充滿性感的魅力，令我幾乎窒息，竟不由自主地將視線轉向了一旁……

未幾，我將手中那頂把玩多時的帽子輕輕地擱在一旁的梳妝台上，忽然若有所思地陷入沉默，猶自不敢正視她的嬌顏。

「你生氣了嗎？」她突然仰臉看著我，幽幽地問道。

「那倒不是的。」我好不容易將目光轉向了她的，然後沒話找話地冷不丁說道：「剛才父親告訴我了，你當真想去療養院嗎？」

「嗯。老是這個樣子的話，也不知道甚麼時候才會好嘛。只要能快點好起來，隨便哪裡我都願意去的。只是……」

「怎麼啦？你想說甚麼來著？」

「なんでもないの」

「なんでもなくともいいから言って御覧。……どうして
も言わないね、じゃ僕が言ってやろうか？お前、僕にも一
緒に行けというのだろう？」

「そんなことじゃないわ」と彼女は急に私を遮ろうと
した。

しかし私には構わずに、最初の調子とは異って、
だんだん真面目になりだした、いくぶん不安そうな調子で
言いつづけた。

「……いや、お前が来なくともいいと言ったって、そりあ
僕は一緒に行くとも。だがね、ちょっとこんな気がして、
それが気がかりなのだ。……僕はこうしてお前と一緒にな
らない前から、何処かの淋しい山の中へ、お前みたいな可哀
らしい娘と二人きりの生活をしに行くことを夢みていたこ
とがあったのだ。お前にもずっと前にそんな私の夢を打ち
明けやしなかったかしら？ほら、あの山小屋の話さ、そん
な山の中に私達は住めるのかしらと云って、あのときはお
前は無邪気そうに笑っていたろう？……実はね、こんどお前
がサナトリウムへ行くと言い出しているのも、そんなことが
知らず識らずの裡にお前の心を動かしているのじゃないか
と思ったのだ。……そうじゃないのかい？」

彼女はつとめて微笑みながら、黙ってそれを聞いていた
が、

「そんなこともう覚えてなんかいないわ」と彼女はきつぱ

「也沒甚麼。」

「沒甚麼也不打緊的呀，你且說來聽聽。……你是無論如何也不肯說的嘍？那，我就幫你說了吧？你是想要我也跟你一起去，對不？」

「才不是呢。」她急忙打斷我的話頭。

然而我沒有理會她，繼續說了下去。語氣與方才迥異，漸漸變得認真起來，多少顯得有點不安：

「……不，就算你說了無須我去，我也是非去不可的。不過呢，我有一種小小的感覺，就是它讓我心緒不寧……還在我像現在這樣跟你走到一起以前，我就夢想著和你這樣可愛的姑娘一塊兒，跑到一座遠離塵世的深山裡去生活，兩人朝夕相伴，再無別人。我不是老早就對你也談起過我的這個夢想嗎？喏，就是說到山中小木屋那次嘛。那時候你不是還笑得天真爛漫，說那種深山老林裡我們住得慣住不慣呀？……其實吧，我覺得這次你提出來要進療養院，八成就是因為那些話兒不知不覺中讓你為之心動了……難道不是這樣嗎？」

她努力微笑著，安靜地聽完這些話，卻乾脆地說道：

「我已經不記得有這麼回事了。」

りと言った。それから寧ろ私の方をいたわるような目つきでしげしげと見ながら、「あなたはときどき飛んでもないことを考え出すのね……」

それから数分後、私達は、まるで私達の間には何事もなかったような顔つきをして、フレンチ扉の向うに、芝生がもう大ぶ青くなって、あちらにもこちらにも陽炎らしいものの立っているのを、一緒になって珍らしそうに眺め出していた。

* * *

四月になってから、節子の病気はいくらかずつ回復期に近づき出しているように見えた。そしてそれがいかにも遅々としていればいるほど、その回復へのもどかしいような一歩一歩は、かえて何か確実なもののように思われ、私達には云い知れず頼もしくさえあった。

そんな或る日の午後のこと、私が行くと、丁度父は外出していて、節子は一人で病室にいた。その日は大へん気分もよさそうで、いつも殆ど着たきりの寝間着を、めずらしく青いブラウスに着換えていた。私はそういう姿を見ると、どうしても彼女を庭へ引っぱり出そうとした。すこしばかり風が吹いていたが、それすら気持ちのいいくらい軟らかだった。彼女はちょっと自信なさそうに笑いながら、それでも私にやっと同意した。そうして

隨後反而用安慰般的眼神端詳著我：

「你常常會冒出些莫名其妙的念頭來嘛……」

幾分鐘之後，我們好像彼此之間甚麼事情都不曾發生似的，一起興味盎然地眺望法式玻璃門外來：草坪上綠意已濃，滿日游絲飄曳。

* * *

進入四月後，節子的病看似一步一步地抵近了恢復期。而這進展愈是遲緩，邁向恢復的那令人心焦的每一步，卻反而更令人覺得扎實可信，甚至給了我們一種無以言喻的踏實感。

就在這樣的一個午後，我去時，正趕上父親外出不在家，只有節子一人待在病房裡。那天她看上去情緒很好，幾乎長年不變的那一身睡衣，也難得地換成了藍色襯衫。一見她那身打扮，我便尋思著定要把她拖到院子裡去。儘管颯著些許微風，可連那風也軟柔柔的，令人神怡。她似乎稍欠自信地笑著，最終還是答允了我。於是將手搭在我的肩頭，顫巍巍地移步挪出法式玻璃門，怯生生地來到了草坪上，沿著灌木形成的樹牆，朝著混雜著各色外國品種、枝丫交錯分辨不出彼此、花繁葉

春^は。

わたし かた て ドア なん あぶ
私の肩に手をかけて、フレンチ扉から、何だか危かしそ
うな足つきをしながら、おずおずと芝生の上へ出て行っ
た。あし いけがき そ いけがき
生牆に沿うて、いろいろな外国種のも混じって、どれ
がどれだか見分けられないくらいに枝と枝を交わしなが
ら、ごちやごちやに茂っている植込みの方へ近づいてゆくと、
それらの茂みの上には、あちらにもこちらにも白や
黄や淡紫の小さな蒼がもう今にも咲き出しそうになっ
ていた。わたし わたし
私はそんな茂みの一つの前に立ち止まると、去
ねん あき
年の秋だったか、それがそうだと彼女に教えられたのを
ひよっくり思い出して、

「これはライラックだったね？」と彼女の方をふり向きな
がら、なか き
半ば訊くように言った。

「それがどうもライラックじゃないかも知れないわ」と
わたし かた かる て かのじよ き どく
私の肩に軽く手をかけたまま、彼女はすこし気の毒そうに
こた
答えた。

「ふん……じゃ、いままで嘘を教えていたんだね？」

うそ つ
「嘘なんか衝きやしないけれど、そうって人から頂戴
したの。……だけど、あんまり好い花じゃないんですもの」

「なあんだ、もういまにも花が咲きそうになってから、
そんなことを白状するなんて！じゃあ、どうせあいつも
……」

わたし とな しげ ほう ゆび
私はその隣りにある茂みの方を指さしながら、「あいつ
なん
は何ていったっけなあ？」

エニシダ かのじよ ひ と わたしたち こんど
「金雀児？」と彼女はそれを引き取った。私達は今度はそっ

茂的花木叢走近了去，只見那叢叢繁枝上佈滿了白色、黃色、淡紫色的小花蕾，已經含苞欲放。我在這樣的一簇花枝前駐足不前，陡然回想起好像是去年秋天，她曾經告訴過我這花的名字。

「這是丁香花吧？」我扭頭望著她，半是詢問地說道。

「那好像並不是丁香花哦。」她的手依然輕輕地搭在我的肩頭，略顯歉然地答道。

「噢……那麼，你一直都在跟我瞎說嘍？」

「我怎麼可能瞎說呢，那是人家送花來時告訴我的……不過，反正也不是甚麼好花。」

「好呀！連花都快要開了，你才如實招供！這麼說來，莫非那個也……」

我指著旁邊那叢花卉問道：「你說那叫甚麼來著？」

「金雀花？」她接過了話茬。這次我們移足來到了那叢花

春。

ちの茂みの前に移っていった。「この金雀児は本物よ。ほら、
黄いろいのと白いのと、蒼が二種類あるでしょう？こっち
の白いの、それあ珍しいのですって……お父様の御自慢
よ……」

そんな他愛のないことを言い合いながら、その間じゅう
節子は私の肩から手をはなさずに、しかし疲れたというよ
りも、うっとりとしたようになって、私に靠れかかっていた。
それから私達はしばらくそのまま黙り合っていた。そ
うすることがこういう花咲き匂うような人生をそのまま少
しでも引き留めて置くことが出来でもするかのよう。と
きおり軟らかな風が向こうの生牆の間から抑えつけられ
ていた呼吸かなんぞのように押し出されて、私達の前に
している茂みにまで達し、その葉を僅かに持ち上げながら、
それから其処にそういう私達だけをそっくり完全に残した
まんま通り過ぎていった。

突然、彼女が私の肩にかけていた自分の手の中にその顔
を埋めた。私は彼女の心臓がいつもよりか高く打っている
のに気がついた。

「疲れたの？」私はやさしく彼女に訊いた。

「いいえ」と彼女は小声に答えたが、私はますます私の
肩に彼女のゆるやかな重みのかかって来るのを感じた。

「私がこんなに弱くって、あなたに何だかお気の毒で
……」彼女はそう囁いたのを、私は聞いたというよりも、
むしろそんな気がした位のものだった。

卉前。「這個金雀花可是真的喲。你瞧，不是有黃白兩種花蕾嗎？這邊這種白色的，聽說那可是名貴品種喲……父親可引以為豪啦……」

就這麼東拉西扯些閒言淡語，其間節子的手始終搭在我的肩上不離，與其說是因為倦乏，不如說是陶然欲醉似的，依偎著我。久久地，我們就這樣無言相對。彷彿這麼做就能夠讓這繁花吐豔般的人生盡可能地留駐片刻。不時地，軟風宛似壓抑已久的呼吸一般，從灌木構築的樹牆那端被擠了出來，掠過我們面前的花叢，將葉片微微掀起，然後又飄然逝去，獨將我們兩人原封不動地留在那裡。

突然，她將臉埋進搭在我肩頭的自己手裡，我感覺到她的心臟狂跳，遠甚於平日。

「累了嗎？」我溫柔地問她道。

「沒有。」她小聲回答。我益發感受到她的重量緩緩地壓上了我的肩膀。

「我身子這麼弱，總覺得對不起你……」她的這聲低語，我與其說是聽到的，還不如說是感覺到的。

春。

「お前のそういう脆弱なのが、そうでないより私にはもっとお前をいとしいものにさせているのだと云うことが、どうして分らないのだろうか……」と私はもどかしそうに心のうちで彼女に呼びかけながら、しかし表面はわざと何にも聞きとれなかったような様子をしながら、そのままじっと身動きもしないでいると、彼女は急に私からそれを反らせるようにして顔をもたげ、だんだん私の肩から手さえも離して行きながら、

「どうして、私、この頃こんなに気が弱くなったのかしら？ こないだうちは、どんなに病気のひどいときだって何とも思わなかった癖に……」と、ごく低い声で、独り言でも言うように口ごもった。沈黙がそんな言葉を気づかわしげに引きのばしていた。そのうち彼女が急に顔を上げて、私をじっと見つめたかと思うと、それを再び伏せながら、いくらか上ずったような中音で言った。「私、なんだか急に生きたくなったのね……」

それから彼女は聞えるか聞えない位の小声で言い足した。「あなたのお蔭で……」

* * *

それは、私達をはじめて出会ったもう二年前にもなる夏の頃、不意に私の口を衝いて出た、そしてそれから私が

「你的這種羸弱，比起不是這樣更讓我疼愛。這一點，你怎麼就不明白呢……」我急不可耐地在內心裡向她傾訴著，可表面上卻裝作甚麼也沒聽見，立在那裡一動不動。她猛地抬起頭來向後仰去，甚而連手也漸漸離開了我的肩頭，彷彿自言自語一般，聲音低抑地嘟囔道：

「這一陣子我怎麼變得這麼憂心忡忡了呢？從前就算病情再嚴重，我可是都沒當回事兒來著……」

沉默將她的話音拉長，長得令人不安。過了一會兒，她突兀地仰起臉，直勾勾地盯著我看，旋即又低下頭去，用略帶亢奮的中音說道：「不知道為甚麼，我突然又想活下去了……」

接著又用若有若無的低聲添上了一句：「多虧有你……」

* * *

那是些歡愉的日子，歡愉得令人黯然神傷。就如同早在我倆初次相遇兩年之前的那個夏日裡我於漫不經意間脫口而

春^は。

何^{なん}ということもなしに口^{くち}ずさむことを好^{この}んでいた、風^{かぜ}立^だちぬ、いざ生^いきめやも。

という詩^{しく}句^くが、それきりずつと忘^{わす}れていたのに、又^{また}ひよっくりと私^{わたし}達^{たち}に蘇^{よみがえ}ってきたほどの、——云^いわば人^{じん}生^{せい}に先^{さき}立^だった、人^{じん}生^{せい}そのものよりかもつと生^いき生^いきと、もつと切^{せつ}ないままでに愉^{たの}しい日^ひ々^びであつた。

私^{わたし}達^{たち}はその月^{げつ}末^{まつ}に八^やヶ岳^{たけ}山^{さん}麓^{ろく}のサナトリウムに^い行くため^{ため}の準^{じゆん}備^びをし出^だして^いいた。私^{わたし}は、一^{ちよつ}寸^とした識^{しり}合^あいになつて^いる、そのサナトリウム^{いんちよう}の院^{いん}長^{ちやう}がときどき上^{じやう}京^{きやう}する機^き会^{かい}を捉^{とら}えて、其^{その}処^こへ出^でかけるままでに一^{いち}度^ど節^{せつ}子^この病^{びやう}状^{じやう}を診^みて^ら貰^{もら}うことにした。

或^ある日^ひ、やつとのこと^{こうがい}で郊^{せつ}外^こにある節^{せつ}子^この家^{いえ}までその院^{いん}長^{ちやう}に^き来^もて貰^{もら}って、最^{さい}初^{しよ}の診^{しん}察^{さつ}を受^うけた後^{あと}、「な^なあに大^{たい}した^{した}ことはな^ないでしょう。ま^まあ、一^{いち}二^に年^{ねん}山^{やま}へ来^きて辛^{しん}抱^{ぼう}な^なさるん^んですな^なあ」と病^{びやう}人^{にん}達^{たち}に言^いひ残^{のこ}して忙^{いそ}し^しそうに帰^{かえ}ってゆ^ゆく院^{いん}長^{ちやう}を、私^{わたし}は^{えき}駅^{えき}ま^みで^み見^おく^くて^い行^いつた。私^{わたし}は^{かれ}彼^{かれ}から自^じ分^{ぶん}に^きだ^だけ^だでも、もつと正^{せい}確^{かく}な彼^{かの}女^{じよ}の病^{びやう}態^{たい}を聞^きかして^きお^おいて^ら貰^{もら}いた^たか^かつた^たのだ^だつた。

「しかし、こ^{びやうにん}んなこと^いは病^い人^{にん}には言^いわぬ^ぬよう^{よう}にした^{した}ま^まえ。父^{ちち}親^{おや}には^{ぼく}その^{はな}うち^{おも}僕^{おも}から^{いんちよう}も^{いんちよう}よ^{いんちよう}く^{いんちよう}話^{いんちよう}そう^{いんちよう}と思^{いんちよう}う^{いんちよう}が^{いんちよう}ね」院^{いんちよう}長^{ちやう}は^{いんちよう}そ^{いんちよう}んな^{いんちよう}前^ま置^えき^おを^おし^おな^おが^おら^お、少^すし^き気^きむ^きず^きか^きしい^か顔^かつ^かき^かを^かして^か節^{せつ}子^この容^{よう}態^{たい}を^{よう}か^{よう}な^{よう}り^{よう}細^こか^こに^こ私^{わたし}に^{わたし}説^{せつ}明^{めい}して^く呉^くれた。それ^{それ}から^{それ}を^{それ}だ^だま^だして^だ聞^きいて^きいた^き私^{わたし}の^{わたし}方^{ほう}を^みじ^みつ^みと^み見^みて、^き君^{きみ}も^{きみ}ひ^{きみ}ど^{きみ}く^{きみ}顔^か色^{いろ}が^わ悪^{わる}い^きじ^きや^きない^きか。つ^きい^きで^きに^き君^{きみ}の^き身^{しん}体^{たい}も^み診^みて^みお^みいて

出、從此以後便喜歡上了它、無緣無故地常要淺吟低誦的「風乍起。合當奮意向人生。」那行詩句一般，分明忘懷已久，卻又悄然蘇生——可謂是早於人生之先、遠比人生本身更為鮮活的日子。

我們開始為月底前往八岳山麓的療養院做準備。我們打算趁小有交情的那家療養院院長偶爾來京的機會，在動身趕赴那裡之前，請他為節子診視一次病情。

一天，總算將那位院長請到了地處郊外的節子家裡。接受了首次診察後，只見院長衝著病人留下一句「看來沒啥大不了。姑且到山裡來熬它個一年兩載吧」，說罷便要匆匆地歸去，我送他到火車站，想藉機與他獨處，請他把更為準確的病情，講給我聽。

「不過，這種話你千萬別告訴病人。至於她父親嘛，過幾天我自己也會跟他好好說說的。」院長講過這麼一通開場白後，神色凝重地將節子的病狀仔仔細細地對我說明了一番。然後緊緊地盯著沉默不語傾耳諦聽的我，同情地說道：「你的臉色也非常糟糕嘛。我得順便給你也做個檢查啊。」

やるんだったな」と私^{わたし}を気^きの毒^{どく}がするように言った。

駅^{えき}から私^{わたし}が帰^{かえ}って、再^{また}び病室^{びやうしつ}にはいってゆくと、父^{ちち}はそのまま寝^ねている病人^{びやうにん}の傍^{そば}に居^い残^{のこ}って、サナトリウムへ出^でかける日取^{ひどり}などの打^うち合^あわせを彼女^{かのじよ}とし出^だしていた。なんだか浮^うかない顔^{かお}をしたまま、私^{わたし}もその相談^{そうだん}に加^{くわ}わり出^だした。

「だが……」父^{ちち}はやがて何^{なに}か用事^{ようじ}でも思^{おも}いついたように、立^たち上^あがりながら、「もうこの位^{ぐらい}に良^よくなっているのだから、夏^{なつ}中^{つなか}だけでも行^いっていたら、よかりそうなものだがね」といかにもふしん^{ふしん}に言^いって、病室^{びやうしつ}を出^でていった。

二人^{ふたり}きりになると、私^{わたし}達^{たち}はどちらからともなくふっと黙^{だま}り合^あった。それはいかにも春^{はる}らしい夕暮^{ゆうぐれ}であった。私^{わたし}はさっきからなんだか頭^{ずつう}痛^{いた}がしだしているような気がしていたが、それがだんだん苦^{くる}しくなってきたので、そっと目^め立^だたぬように立^たち上^あがると、硝子^だ扉^あの方^がらと、硝子^{びやうしつ}扉^{びら}の方^{はう}に近^{ちか}づいて、その一方^{いっ}の扉^{びら}を半^{なか}ば開^{ひら}け放^{はな}ちながら、それに靠^{もた}れかかった。そうしてしばらくそのまま私^{わたし}は、自分^{じぶん}が何^{なに}を考^{かんが}えているのかも分^わからない位^{ぐらい}にぼんやりして、一面^{いちめん}にうっすらと靄^{もや}の立^たちこめている向^{むか}うの植^{うえ}込^こみのあたりへ「いい匂^{におい}がするなあ、何^{なん}の花^{はな}のにおいだろう——」と思^{おも}いながら、空^{くう}虚^{きよ}な目^めをやっていた。

「何^{なに}をしていらっしゃるの？」

私^{わたし}の背^{はい}後^ごで、病人^{びやうにん}のすこし嗚^{しやが}れた声^{こえ}がした。それが不^ふ意^いに私^{わたし}をそんな一^{いっしゆ}種^まの麻^ま痺^ひしたような状^{じやう}態^{たい}から覚^{かく}醒^{せい}させた。私^{わたし}は彼女^{かのじよ}の方^{ほう}には背^せ中^{なか}を向^むけたまま、いかにも何^{なに}か

我從車站回來後，再度走進病房，父親仍舊留在臥床未起的病人身邊，同她商量動身前往療養院的日期。我繃著一張陰沉的臉，也加入了他們的討論。

「可是……」父親俄而似乎想起了有事待辦，便一面起身，一面大惑不解地說道：「既然已經恢復得這麼好了，那只消去那裡待上一個夏天，不就足夠了嗎？」

說著，走出了病房。

只剩下兩個人後，我倆不約而同地默然不語。那是一個春意盎然的黃昏。我自剛才起便覺得有些頭痛，那痛楚愈來愈強烈起來。我不露聲色地站起身，走近玻璃門，將其中一扇打開一半，倚門而立。然後半晌呆立不動，心內茫然，甚至不知道自己在想些甚麼，將呆滯的目光投向對面籠罩在薄薄一片暮靄之中的花叢，心忖道：「味道好香吶，是甚麼花啊？」

「你在做甚麼呢？」

背後傳來病人略顯啞啞的聲音，冷不丁將我從那樣一種麻木狀態中喚醒。我猶自背對著她，假裝是在思考毫不相干的事，語氣很不自然地開口道：

春^は。

ほか かの かんが と ちよう
他のことでも 考えていたような、取ってつけたような 調
子で、

「お前のことだの、山のことだの、それからそこで僕達の
暮らそうとしている生活のことだのを、^{かんが} 考えているのさ
……」と途切れ途切りに言い出した。が、そんなことを言
い続けているうちに、^{わたし} 私 は ^{ほんとう} なんだか ^{ほんとう} 本当に ^{こと} そんな ^{いま} 事を今し
がたまで ^{かんが} 考えていたような ^き 気がしてきた。そうだ、それか
ら ^{わたし} 私 は ^{かんが} こんな ^{かんが} ことも ^{かんが} 考えていたようだ。——「向こうへ
いったら、^{ほんとう} 本当に ^{こと} いろいろ ^{おこ} な事が起るだろうなあ。……し
かし ^{じんせい} 人生 ^{まえ} というものは、お前がいつもそうしているように、
何もかもそれに ^{まか} 任せ ^き 切 ^お っ ^{ほう} て置いた方がいいのだ。……そう
すればきっと、^{わたしたち} 私 達が ^{ねが} それを ^{おも} 希 ^{おも} おう ^{およ} などとは ^お 思 ^お いも ^お 及 ^お ば ^お な
かったようなものまで、^{わたしたち} 私 達 ^{あた} に ^し 与 ^し え ^し ら ^し れ ^し る ^し かも ^し 知 ^し れ ^し ない ^し の ^し だ。
……」そんなことまで ^{こころ} 心の ^{うち} 裡 ^{かんが} で ^{かんが} 考 ^{かんが} え ^{かんが} な ^{かんが} が ^{かんが} ら、^{かんが} それ ^{かんが} に
は ^{すこ} 少 ^{じぶん} し ^き も ^き 自 ^{わたし} 分 ^{わたし} だ ^{なん} では ^{なん} 気 ^{なん} が ^{なん} つ ^{なん} か ^{なん} ず ^{なん} に、^{なん} 私 ^{なん} は ^{なん} か ^{なん} え ^{なん} っ ^{なん} て ^{なん} 何 ^{なん} だ ^{なん} も ^{なん} ない
よ ^{なん} う ^{なん} に ^{なん} 見 ^{なん} え ^{なん} る ^{なん} 些 ^{なん} 細 ^{なん} な ^{なん} 印 ^{なん} 象 ^{なん} の ^{なん} 方 ^{なん} に ^{なん} す ^{なん} っ ^{なん} か ^{なん} り ^{なん} 気 ^{なん} を ^{なん} と ^{なん} ら ^{なん} れ ^{なん} て ^{なん} いた
のだ。……

そんな庭面はまだほの明るかったが、気がついて見ると、
^へ 部 ^や 屋 ^や の ^な な ^か は ^も う ^す っ ^か り ^う 薄 ^う 暗 ^う くなっていた。

「明りをつけようか？」^{あか} 私 ^{わたし} は ^{きゆう} 急 ^き に ^き 気 ^き を ^き と ^き り ^き な ^き お ^き し ^き な ^き が ^き ら
い ^い 言 ^い っ ^い た。

「まだつけないでおいて ^{ちょうだい} 頂 ^{こた} 戴 ^{かのじよ} ……」^{こえ} そう ^{こえ} 答 ^{こえ} え ^{こえ} た ^{こえ} 彼 ^か の ^{かのじよ} 女 ^{こえ} の ^{こえ} 声 ^{こえ}
は ^{まえ} 前 ^か より ^か も ^か 囁 ^か れ ^か て ^か いた。

^{わたしたち} しばらく ^{ことば} 私 達は ^{ことば} 言葉 ^{ことば} も ^{ことば} な ^{ことば} く ^{ことば} て ^{ことば} いた。

「我在想你的事呀，想山裡頭的事，還有我們在那裡即將開始的生活……」我說得斷斷續續，可說著說著，居然連自己也覺得剛才當真是在琢磨這些事情來著。對了，而且我還在思考這樣的事情呢——「到了那裡後，恐怕真會發生許多事情呢……然而人生這玩意兒，就像你始終在做著的那樣，把一切都委身於它才好。……這麼做的話，說不定連我們從未奢望過的東西，它甚至也會慷慨惠賜給我們呢……」

分明是在心底琢磨著這樣的事情，我竟然對此卻毫無自覺，反而被那些無關緊要的細枝末節勾走了魂去……

庭院的地面依舊微微發亮，可回過神來一看，房間內已經是一片昏暗了。

「要開燈嗎？」我趕忙振作精神，問道。

「請暫時還不要開燈……」她答話時的聲音比方才更顯啞了。

我們倆沉默片刻。

春。

「私、すこし息ぐるしいの、草のにおいが強くて……」

「じゃ、こども締めて置こうね」

私は、殆ど悲しげな調子でそう応じながら、扉の握りに手をかけて、それを引きかけた。

「あなた……」彼女の声は今度は殆ど中性的なくらいに聞えた。「いま、泣いていらしたんでしょう？」

私はびっくりした様子で、急に彼女の方をふり向いた。

「泣いてなんかいるものか。……僕を見て御覧」

彼女は寝台の中から私の方へその顔を向けようともしなかった。もう薄暗くってそれとは定かに認めがたい位だが、彼女は何かをじっと見つめているらしい。しかし私がそれを気づかわしように自分の目で追って見ると、ただ空を見つめているきりだった。

「わかっているの、私にも……さっき院長さんに何か言われていらしたのが……」

私はすぐ何か答えたかったが、何の言葉も私の口からは出て来なかった。私はただ音を立てないようにそっと扉を締めながら再び、夕暮れかけた庭面を見入り出した。

やがて私は、私の背後に深い溜息のようなものを聞いた。

「御免なさい」彼女はとうとう口をきいた。その声はまだ少し顫えを帯びていたが、前よりもずっと落着いていた。「こんなこと気になさらないでね……。私

「我有點兒喘不過氣來。是花的香味太濃了……」

「那我把這扇門也關起來了噢。」

我的語氣近乎悲哀，回應道，伸手抓住把手，將門拉上。

「你……」這次她的聲音聽上去幾乎接近中性：「剛才是在哭吧？」

我做出驚訝的神情，急忙扭頭望著她：

「怎麼會哭呢？……你瞧瞧我。」

她躺在床上，甚至不願把臉對著我。天色已微暗，難以看明白，不過她似乎目不轉睛地在凝視著甚麼。然而當我滿心憂慮地縱目追逐她的視線時，卻發現她只是在凝望著一片虛空而已。

「我知道的……剛才院長跟你說了些甚麼……」

我很想立馬作答，然而甚麼話也沒能說出來。我只是悄然無聲地輕輕關好門，重又入神地望著暮色降臨的庭院地面。

俄而，我聽到背後傳來一聲長歎。

「對不起。」她終於開口道。那聲音裡依然帶著少許顫悸，卻比先前鎮靜多了：「你不要再擔心這種事情啦……從今往後，我們能活多久就活多久，好嗎？……」

春。

たち ほんとう い い
達、これから本当に生きられるだけ生きましよう
ね……」

わたし かのじよ め ゆびさき
私はふりむきながら、彼女がそっと目がしらに指先をあ
てて、そこにそれをじっと置いているのを認めた。

* * *

しがつけ じゅん あ うすぐも あさ ていしゃじょう ちち み おく
四月下旬の或る薄曇った朝、停車場まで父に見送られ
て、私達はあたかも蜜月の旅へでも出かけるように、父の
前はさも愉しそうに、山岳地方へ向う汽車の二等室に乗り
込んだ。汽車は徐かにプラットフォームを離れ出した。そ
の跡に、つとめて何気なさそうにしながら、ただ背中だけ
少し前屈みにして、急に年とったような様子をして立っ
ている父だけを一人残して。――

はな わたしたち まど し
すっかりプラットフォームを離れると、私達は窓を締め
て、急に淋しくなったような顔つきをして、空いている二
等室の一隅に腰を下ろした。そうやってお互の心と心を
温め合おうとでもするように、膝と膝とをぴったりとくっ
つけながら……

我扭過頭去，看見她悄悄地將指尖貼在眼角上，再也沒有移開。

* * *

四月下旬一個微陰的早晨，我們在父親的伴送下來到火車站。宛如啟程去蜜月旅行一般，我們在父親面前滿臉喜悅地，坐進了駛往山嶽地帶的二等車廂。火車緩緩地駛離了站台，將父親一個人留在了後面。父親努力做出若無其事的神態站在那裡，只不過脊背微微前屈，彷彿陡然間蒼老了許多……

當火車完全駛出了站台後，我們關好車窗，一下子流露出落寞的表情，在二等車廂一隅的空座上坐了下去。彷彿是要互相溫暖對方的心靈一般，膝頭與膝頭緊緊相偎……

作者簡介

堀辰雄

1904—1953，日本小說家，昭和初期的新心理主義的代表作家，是芥川龍之介唯一的弟子。他受西歐心理主義文學的影響，擅長人物心理描寫，尤其擅長描寫人物面對死亡時敏感纖細的內心感受，讓讀者從中感受到看似柔弱的生命中蘊涵的無與倫比的韌性。1930年以小說《神聖家族》登上文壇。1938年以自身經歷為基礎創作小說《風起了》。1941年小說《菜穗子》獲中央公論文藝獎。代表作有《神聖家族》《美麗村莊》《風起了》《菜穗子》等。

譯者簡介

施小焯

畢業於復旦大學外文系日本語言文學專業，畢業後留校任教。後留學於日本早稻田大學大學院日本文學研究科，並執教於日本大學文理學部。

主要譯著有村上春樹《當我談跑步時我談些甚麼》《1Q84》《天黑以後》《沒有色彩的多崎作和他的巡禮之年》等作品的簡體中文版，以及川上弘美《老師的提包》簡體中文版等多部譯著。